ＩＳ -アベレージ　オア　ハーフ-

瑠璃心月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　－アベレージ　オア　ハーフ－

【Ｎコード】
Ｎ７７４５Ｔ

【作者名】
瑠璃心月夜

【あらすじ】
短編や趣味でお話し・・・もとい妄想を書くことが大好きな妄想族の瑠璃心月夜です
簡単なあらすじはＩｓ　－アベレージ　オア　ハーフ－　は藍越高校に通う一人の学生がＩＳが使える・・・という感じで
”男でＩＳが使える奴が一人出たのだから他にも居るはずだ！！”
という理由で行われた検査によって発見された二番目の男の話で

す

更新は・・・・・亀です

プロローグ（前書き）

ええ～

あまり自信はありません

が

友と考えていい作品にしていこうと思っております

では、どうぞ

プロローグ

物語は始まる、いや……始まっている

俺……俺の立ち位置はオリムラ　イチカという一つ年下の男のキッカケによって無くなった。
立ち位置……それは平均と半分という名の制約に基づいていた立ち位置……その位置に不満はなかった。
むしろその位置にいたからこそ友人の役に立っていたこともあり好きな位置だった。
しかしその立ち位置はもう無い、そして今思えばそんな位置よりも今の立ち位置が好きな自分がいる。
これもオリムラ　イチカと天才のおかげかもしれないな……
制約を打ち破れなかった俺に勇気ともう一度立ち向かうためのチャンスをくれたのだから。

「IS学園　1年1組　2番　安部（あべ）　零時（れいじ）！」

これが今の俺の立ち位置だ！

そして今は黒い所属不明機と戦闘中

「俺は！俺は！平均なんて認めない！！！！」

プロローグ（後書き）

み、短い……もっと長くできるよう頑張ります

01（前書き）

うぅ……自信が……

でも皆様に読んで楽しんでもらえるように考えました

では、どうぞ

01

Ａｖｅｒａｇｅ

想像以上にキツイ、これはキツイ　この一言が一番今の状況に似あう。
隣にいる彼を見ると顔が青ざめていた……きっと自分もこんな感じになっているだろう。
そんな彼は俺の目線に気付いたのかこちらを見て

「なぁ…零時」

「あぁ…言いたいことはわかるぞ一夏」

彼の名前は一夏、織斑　一夏だ
世界で一番最初にＩＳを動かした男だ
そして俺が２番目、正直今はココに居るのを一夏のせいにして殴りたい
そしてここはＩＳ学園、入学してから初めての教室入りだ
まさかこんなにキツイとは思わなかった…
え？きついって？そりゃ好奇心と物珍しさにこんなに見られたら自分が動物にでもなったようであまりいい気分ではないのだ
それが積もり積もって精神的ダメージへと変わっていったのだ
今までこんなに注目されたことがなかっただけに今の状況はキツイ

でも！俺は逃げない！

俺は今回を機に”もう一度変われるように努力してます”と一方的にとある天才ウサギに約束したのだから逃げるわけにはいかない。

「わかるよな…でもやっぱりこれは」

一夏は苦笑いをしながら言う

一夏は基本考えてることが簡単にわかるようなタイプなのだが今回はそんなこと関係ない

「あぁ・・・これは」

「「きついな…」」

そんな俺たち二人を救うように教室の扉が開き

一人の女性が入ってくる、その女性は教卓の所に来ると

「みなさん入学おめでとうございます、私はこのクラスの副担任の山田真耶です、これから一年間よろしくお願いしますね」

にっこりと微笑みながら挨拶をした山田先生

しかし教室は俺と一夏に注目されていて反応がない

「……」

ついに微笑みながら汗をかき始めた山田先生

ついでに顔も青ざめてきているではないか

「そ、それでは自己紹介でもしましょうか」

何とか復活？をして話を進めていく

そして1番の相川さんの自己紹介が終わり

「次は安部君ですね」

ちなみに二番ならば相川さんの後ろ
廊下側の前から二番目にふつう席なるはずだが
俺と一夏は出席番号順になると離れるので唯一の同性なので隣にしてほしいと言い教卓の前にしてもらった

席を立ち後ろを向き

「安部　零時です　みんなとは歳が一つ違うが基本どんな話題でも構わないから気軽に話しかけてくれ　一年間よろしく」

うまくはないだろうが下手でもない自己紹介はできたと思う
まぁ最初はこのくらいぐらいだろ

「織斑くんっ！織斑一夏くんっ！」

「は、はい！」

おっと　いつの間にかお行まで進んでたか……
あとでしっかり顔と名前を憶えないとだな

それにしても一夏……お前自分の番が終わってないのにぼーっとしてたのかよ
あぁ～……いやたぶんこの独特の緊張感で頭真っ白になってたんだな

裏声なんか出すからクスクスと笑われてまでいる

「あっ、あのごめんね大きな声出しちゃって。怒ってますか？ごめんね、でもあ行から初めて今お行で織斑くんの順番なの、だから自己紹介してくれないかな？」

ふむ、この先生はどうも腰が低いというかなんというか……まぁ、きっとそれがこの先生のいいとこなんだろうな

「す、すみません。緊張してて……自己紹介ですよね？わかりました」

そこで立ち上がり俺と同じく後ろを向いてクラスメイトと目が合うような感じになる

一夏が「うっ…」と怯んだ気がしたが……気にしない

「えっと……織斑　一夏です、よろしくお願いします」

あぁ…一夏俺より少ない自己紹介はまずいぞ……ほれ、クラスメイトたちのあの目「もう少し何か教えてくれないかな？」目線だ……まぁこれを避けるには直ちに座ることか要望に応えることだな……

「すぅ～はぁ～」

おっ！深呼吸したってことはなんか言うつもりなのか？！　いやないな、うん　少しの付き合いだがそれくらいはわかる

おっ！千冬さんだ、一夏気づいてないってことは

「以上です！」

スパーン！

うむ、いい音ですな　まぁ弟のあんな自己紹介見たらああなるよな

「イッッ！」

頭に手を当てながら後ろを振り返る一夏

「ち、千冬姉！？」

スパーン！

「織斑先生と呼べ馬鹿者、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな山田君」

「いえいえ、副担任ですからこれくらいはしないと……」

ふむ、織斑家に滞在したときは千冬さんを見ていたときは「この人職場で大丈夫かよ……」と思ってｔ

スパーン！

「イッテ！なんで一夏じゃなくて俺が叩かれなきゃいけないんだよ千冬ｓ…先生」

先生って言ったんだこれで叩かれないだろう

「……し、失礼なことを考えた罰だ」

ふむ、どうやら千冬先生というのは大丈夫みたいだ
と、いうか人の心を読まないでほしいし
これで赤面してたらかわいいのに……

スパーン！

「ふん！」

だから人の心読まないでほしい……
いやこれはもしや俺は……一夏同じでわかりやすいタイプなのか？！
これは気を付けないとだな、うん

「諸君！私が織斑　千冬だ。君たち新入生を使い物に育てるのが私も仕事だ。」

「「きゃ」」

ん？

「「「キャアーーーーー！！！！」」」

うをい！
なんだなんだ！変質者でも出たのか？！

「千冬様よ！本物の千冬様よ！！」

あぁ…なるほど
つか本物じゃないのがいるみたいな言い方だな、おい

まぁそれからは千冬さんを褒め称える？内容が続き

「静かにしろお前たち……まったく…何故私のクラスにはこうも馬鹿どもが集まるのだ…まぁいい、お前たち！私の話はよく聞け、わかったら返事をしろわからなくても返事をしろ」

「「はい！」」

こうやって千冬さんのしもb……ゲフンゲフン！

あぶない、また叩かれるところだった

それからは1時限目が始まるぎりぎりまで自己紹介が続き1時限目が終わった

そして今は1限と2限の間の休み時間なのだが……

今このクラスに一夏はいない……先ほどポニーテールの女子に連れて行かれた……

と、いうことはだ……このクラスには俺しか男がいない

誰でも良いから……助けt

「うんうん！じゃ私が助けてあげようかレイちゃん？」

あぁ……しまった…こいつも人の心が読めちゃうやつだった

さて……ここに至るまでの事でも考えて時間つぶすかな

01（後書き）

やっと進んだって感じです……

02（前書き）

オリジナルです

02

男がＩＳを動かしたことにより世界規模で行われたＩＳ適性の検査、
男だけに用意された検査
３月に行われ始めた検査
それは小学生から大学生までの年齢限定でＩＳ学園で行われた
これは平日に行われた義務付けられたものだった

今日の午後から藍越高校１年生の番だった
今は俺のクラスの番
検査方法は単純、Ｓｕｉｃａのようにタッチして通るだけ

うん、単純だ

そしてこの検査は小学生から中学生までの終わっており成果はない

「なぁ零時……授業がつぶれたのはいいがつまんないよな～」

午後からと言ってもほかの学校もいるから時間がかかっている
そして俺の前に並んでいる相沢巧彼（あいざわ たくみ）と俺は幼稚園からの幼馴染だ
しかもこの幼馴染、何でもできるイケメンだ……くそう……平均的な俺とは大違いだ

「だよな、周りの学校の連中もやる気がないのが見て取れるな、それにＩＳが使えても得をするとも思えないしな…実際織斑一夏がモルモットになったって噂だってあるんだぞ？」

俺がそんなことを言ったら

「なに？！得がないだと？！嘘だ！！　しかし、ザ！平均のお前が言うってことはそれが世の中の意見だというのか！　だがしかし俺はそれを乗り越えてこその意味があると進言する！　男子ならば女の子いっぱいの中で過ごしたいと思わないのか！？　その夢を叶えてくれるのはＩＳ学園だ！だからこそＩＳを動かして俺はＩＳ学園に入って見せる！！」

そんなことを大声で言う巧
おいおいモルモットになるのを乗り越えるってバカだろ　なんて思っていたら

オォ～～～！！！！　パチパチパチ！！！！

拍手喝采

その通りだ！とか、俺たちが間違っていた！などさっきのやる気のなさから一転目に炎が見えそうなテンションになっている　もはや検査会場（第三アリーナだっけな）にいる男たちの心は一つとなっていた

「こら！そこ！喋ってもいいがうるさくはするな！！」

怒られた？

なんか今のは微妙な怒り方だったな

まぁそれよりも
「男って単純だな……おい」

「何を言うアベレージこと安部零時くん……この会場はもはやロマンを求める者しかいない。すなわち今となっては今の状況こそ平均的になったのだよ……ふふふふ！ふぁっはっはっはっはっは！」

高笑いを始める友人、この友人は世間で言うオタクの部類だと思う
携帯のストラップは今は確か「まよチキ！だ！男装執事って素晴らしいな零時！」と言っていたはずだ　他のものをつけていたときも
「みんなも読むがいいぞ！」とか宣伝していた
まぁここまでは別に人の趣味だし自分が面白いものを面白いと言ってはいけないなんてこともない
実際俺もこの相沢こと奴に毒されオタクの部類に入っていった

そして奴が面白いと言えば面白かったとクラス中が言う、まぁこれも情報共有の範囲内だ、だから別に何も言わん

しかしだ！奴があれはアニメ化する、でも2期はやらないなとか宣言……予言めいたことを言い出すときは凄い
なにが言いたいかというと奴の発言は　言ったことが絶対ではないが大体当たる
これはうちのクラスの共通認識だ
この

そんな相沢こと奴がこんなことを言い出した

「そして！平均と半分をステータスにしている零時は必ずＩＳを動かす！　本当ならば俺が動かしたいがまぁ俺は無理だろうな……俺と変われ！」

は？何を馬鹿なことを。

「おいおい、いくらなんでもそれはない、お前の言い方だと男がＩＳを平均か半分使えてないとダメな計算だぞ。今回ばかりはお前の予言の外れたな」

「ふっ！ならば賭けでもしようじゃないか零時」

「鼻で笑いやがって……良いぜ！その賭け乗った！　それで賭けは何にするんだ？」

「なぁに簡単だ、俺が勝ったときお前はＩＳ学園にいる……そしてあそこには我が妹がいる！つまり！我が妹、相沢悠（あいざわ ゆう）とデートせよ！」

相沢悠……巧の双子の妹で、美人…かわいい系ではなく美人だ、伊達にイケメンの妹じゃないと思う
それにスタイルだって申し分ない

しかし今の俺は冷や汗をかいている……俺は悠に好かれている、なぜかは知らん
本人に直接聞いたら「人を好きになるのに理由が必要なのかな？」と質問を質問で返してきた
俺は悠が苦手だ、何でもできるからだ
今の時代女尊男卑……男ができる奴なのは構わないが……女子ができる奴だと抵抗ができる
きっと俺が考えている＝世の中の男のもそう思っているのだろう
別に悠の事が嫌いなのではない……むしろ自分に不釣り合いで悠に悪くて俺から壁を作ってしまっている
前に巧から「我が愛しの悠を避けるとは！」と説教をくらったとき「お前…なんで悠に壁を作るんだ？好きな奴でもいるのか？」と聞かれたとき俺は「好きな奴はいない。壁は…気まずいんだ…好きじ

ゃない事に申し訳なくてな……それに好きじゃないとはっきり答えて悠があきらめるか？」と答えた
奴は「むしろ好きになるまで愛してあげる、と言うな」と答えた、いや予言しやがった
その後日「お前の気持ちは嬉しいが…」と俺はハッキリしないへたれ根性で悠に言ってみたら「好きな人がいるわけじゃないんだよね？じゃあ大丈夫！むしろ好きになるまで愛してあげるよ」と、とびっきりの笑顔で答えた
ちなみのこの笑顔にドキッとしたのは内緒だ
この後の悠は凄かった……今まで人目や場所を選んでの行動をしていたがその日を境に無くなった
正確には人目のある場所では何もなかった、が！
俺以外には気づかないようにしながらスキンシップをしてきたりするようになった
え？具体的なスキンシップの内容を教えろ？ご想像にお任せしますw

「おい、戻ってこい零時！」
体を揺さぶられ意識がはっきりする
そうやらいろいろと考え込んでしまった
「お、おい待て！悠関係は今関係ないだろこのシスコン！やめてくれ！た、頼む！な！」
「はっはっは！将来の義兄をシスコンと呼ぶか義弟よ」
くそ！このシスコンが！

「さて零時。お前は俺に何を賭けさせたいんだ？内容が内容だからな、なんだっていいぞ」

こいつ…目が本気だ。このシスコンが！
そっちがその気なら俺は！

「俺が勝ったらオタクやめろ」

こういえばこいつはこんな賭けやめるだろう

「キサマァァァァ！！！！！！俺を殺す気か！俺という存在を消したいんだな！そうなんだなぁぁ！！」

いきなり胸倉をつかまれガクガクされたが、「そうなんだなぁぁ！！」の後に電池の切れたように止まった

「良いだろう！我が妹のためだ！それで良かろう！」

「なに？！そんな馬鹿な！お前がオタク精神を賭けるような馬鹿なことをするなんて！」

「これこそが我が妹への兄妹愛なのだよ！悠がＩＳ学園に行き……この一年間…お前の行動を伝え続けてきた…」「なに～！！！！なんてことをしてくれたんだ貴様！！」

「俺も、もう疲れちまったのさ…」「ちょ！そんな事良いから悠に一体なにをいっｔ」

「こらそこ！早く検査して！！！」

話しているうちにいつの間にか自分たちの番になっていたくそ！今は検査よりもこっちが大切だってのな！

「ふっ！先に言ってるぞ零時」

そういいながらＩＳ（確か打鉄とか言ったかな）に向かっていき、手をＩＳに触れる巧

「ふむ、俺には動かせないようだ。さぁ零時！お前に出番だ！お前なら必ず動かす！」

そんなことを大声で言う巧
そのせいか周りは俺に注目していた

「無理に決まってるってのな…」

俺はそういいながらＩＳへと手を触れた

何も起きない

「俺の勝ちだな巧」

ＩＳから手を離し、すでにＩＳから離れていた巧の方へ向かおうとする

周りの期待していた連中からの注目もなくなった

「まぁちょっとまて、もう一回触れてみろ。検査官ももうちょっとだけ待ってください、次は動かしますから」

と、強引に俺をＩＳに触れさせる巧

「お、おい巧、何すんだよ」

「零時！」

いきなりまた大声を出す巧

これでまた注目の的だ

「な、なんだよ」

「地球上の男女比は？」

は？何を言い出すんだこいつは？

「わかるわけないっての」

「単純に考えてでいい」

「そんなの半分半分じゃないか？」

「そうだ零時！難しく考えなければ普通半分半分だと考える！じゃあ次は地球上にいる女性はＩＳを動かせるよな？」

「まぁ織斑一夏を含めなきゃな」

「じゃあ地球上にいる人類の半分の人！はＩＳを動かせるよな？」

「あぁ人類って考えるなら半分の人はＩＳを動かせｒ！！！！！」

俺の頭に何か入ってきた

本来ならば今「動かせるな」と言おうとしてたんだ

でも言う前に手を触れていたモノ、ＩＳから何か……いやＩＳについてＩＳからＩＳを教えてもらった、というのが正しいだろうな

今ならわかっている俺はこれを動かせる

さっきは動かせなかったのに今は動かせることまでわかっている

クソ！嵌められた！
クソ忌々しい友人を見てみると
「はっはっはっはっ！！！！友よ！賭けは俺の勝ちだな！人類の半分は動かせると思った時点で俺の勝ちなのだ！わっはっはっ！」
クソ野郎！俺よりも俺を理解してる奴なんて嫌いだ！
「おっと、今自分よりも自分を理解してる奴なんてと思ったな？残念だが俺はお前が本当に動かせると思ってなかったさ」
「はぁ？！お前だってさっきまであんなに自慢げに言ってたくせにか？！」
「あぁ、お前が動かせると言ったのは悠だ「きっとレイちゃんの平均と半分はレイちゃんがそれでいいと諦めてるからそうなんであって、きっとその考え方さえ変えてしまえばレイちゃんは何でもできるはずだもん」だ、そうだ」
「意味が分からんな……それとＩＳとは関係ないぞ」
俺の平均と半分
それは安部零時の特殊能力と言って良いほどのものだ
実際にそんな能力とかがこの世界にあるわけじゃないが、俺のすることなすことが平均と半分なのである
例えば百点満点テストの平均点が６０．５点　なら俺は６１か６０点だ
例えば百点満点テストの平均点が２０点ならば俺の点数は平均点の２０点　または半分の５０点になっている、この場合はどっちにな

るかわからない

「お前の平均と半分はお前の気持ち次第で変わってくるって事だ、まぁそれは後で聞かせてやる。それよりも早く負けを認めて動かして見たらどうなんだ？ん？」

クソむかつく態度だ

でも負けを認めないのも男として気分がよくない

そう思い俺はＩＳを動かしたのだった

まったく……どうしてこうなったんだか……

02（後書き）

オ、オリジナルって難しい・・・・・

03（前書き）

瑠璃のＨＰが１になった……

ＰＶ＆ユニークを見た

ＨＰマァァァァックス！！！！

03

ＩＳを動かした……あぁ動かした
今、会場は静か、いや…ざわついてはいるがどう反応していいかわからないでいる。これは検査官も同じだ
あたりを見回す、というより前を向いていても３６０。周りが見渡せている
しかし、今の俺にとっては目の前にいる相沢巧さえ見れればいい

「そんなに睨むな零時、わるかったさ」

言葉・表情・態度から謝っている普通ならとわかる
しかし今俺はＩＳを装着しているんだ
表情・声からしてこいつは本当に謝っていないと素人でさえわかってしまう

「なるほど…こりゃ最強にして最悪の平気だな、ＩＳ装着者に嘘はつけないようだぞ巧」

「別に嘘だとばれて構わないさ、賭けさえ守ってくれるならな」

こいつ楽しんでやがる！

「わかってるさ……わかってるっての」

「くっくっくっｗでは悠に教えてやろう」

携帯を耳に当て

「頼む～！！お願いだぁ～やめてくれ！！俺の理性をぶち壊す気か！！！」

「ふむ…まだそんなものがあったのか……もっと過激に攻めた方が良いようだと悠に伝えておこう。おぉ、悠か？」

俺のお願い何て無視で電話を始める巧

「アッ～～～～！！！！」

大声を出して邪魔をしようとする

「お前が言った通りになったぞ。……あぁ、あと零時がデートしてくれるそうだ。……うむ、義弟ができるのを兄は楽しみにしているぞ悠。……あぁ、ではまた」

携帯を閉じてこちらをニヤリとみてくる

そんな……そのまま話が終わってしまうなんて

「さぁ諸君！検査を続けるといい！検査官は零時の対応を学園に訪ねてくるといいと思われる！」

パン！っと手を叩くと再び周りが騒がしくなってきた

お前どこの政治家だ！むしろお前がなってしまえ！！！

「さて零時、もうＩＳから降りていいんじゃないか？」

「ん？あぁそうだな」

動かすときにＩＳに教えてもらった？方法で降りる

「はぁ……俺……どうなるんだろ……」

そんなことを誰に言ったわけでもなくつぶやくと

「まぁモルモットじゃないか？」

「チキショ～～！！！泣いてやる！いやその前にお前を殺してやる～！！！くそ～！」

「まぁそういうな、俺はお前は上を目指せるはずだと思っている。なぜかはハッキリしてないが……お前は本当ならば平均と半分に縛られてるとは俺は思えないんだ、長年一緒にいたがわからなかった、すまない零時」

突然真剣な顔をして謝りだす巧

「お、おいおい、いきなりどうしたんだよ」

「真剣な話だ。俺はお前が好きだ。もちろん俺は友人としてだ、まぁ悠は違うだろうがな。どちらにしても俺の……俺たち相沢兄妹の初めての友だからな。……だから俺たちはお前に恩返しをするんだ」

「なんだなんだ、最後の方聞こえなかったぞ？つか一番最初がたまたま俺だっただけだぞ」

「まぁ気にするな」

何やらあきれた顔をして見てきているが何故だかわからんな

「君が安部　零時か？」
突然後ろから名前を呼ばれ後ろを見る
「ほう、引退した後のここにいると悠が言っていたが、まさかあなたが来るとはな……」
そこにはスーツの似合う女性が立っていた
あぁ、俺もこの人がここにいるのは悠からメールで聞いていた……
悠はＩＳにあこがれているからな
ＩＳが好きでＩＳ学園に入れるよう頑張って勉強してたし
ま、そのおかげで俺は受験勉強中は悠を気にせず過ごせたのだがな
「お前が相沢兄か…まったく私の授業中に電話するとはな…そのおかげでココに早くこれたのだがな」
「いつも妹がお騒がせしています」
ぺこりと頭を下げる巧
「いや相沢妹が問題…というか騒ぎを起こしたのは今回が初めてだ。むしろほかの生徒と違い私が気兼ねなく話せる相手だから助かっている」
「それは良かった。それで…織斑　千冬さん…いや先生、零時の事できたのですか？」
このスーツ姿の女性は織斑　千冬
おそらく織斑　一夏の姉であろう

「それ以外に何があるというんだ、君が安部零時だな？」

睨まれている

いや、きっと睨んでいないのだろうがこの人に見られていると自然と背筋が良くなる

「はい、俺が安部零時です」

「そうか……ＩＳを動かしたんだな」

頭を縦に振り肯定する

「君はこれからこのＩＳ学園に通うことになるだろう……いや通うしかないだろう」

あぁ……学園行き決定なのか

「そして君は来年二年生だ。そして織斑一夏は来年入学…つまり一年生だ。正直ＩＳについて何も知らない人間がいきなり二年から初めても何もわからないまま終わるだろうな」

「えぇ、ＩＳも起動方法とかを感覚的に教えてくれただけで理論とかを教えてくれたわけではありませんから」

「そこでだ、私は一年からＩＳ学園に通うことを進める」

一年から……つまり留年していることと変わらない

「親と…親と話したいですね。もしかしたらＩＳ学園に行くことを

反対されるかもしれませんし」

「そうか、だが親御さんにはもう連絡はして本人の意思に任せると言われている」

おおぉう！仕事が早いな

「なら俺は一年からやらしてもらいます。一年からなら織斑一夏もいるだろうし少しは過ごしやすいだろうし」

「そうか、そうしてもらえるとアイツの姉として安心できる。」

姉…やはり姉弟だったのか

「あぁそれとお前は何でもできるそうだな」

なんでも……ねぇ…

「そうだな、零時は何でも平均的にできるな」

「なんでもはできないっての、平均的にできるだけだよ」

「それより先生、零時はもう帰っていいのでしょうか？」

俺は無視？！ねぇちょっと巧さん？！

知ってた、無視って辛いんだよ？！俺はいじられキャラじゃないんだからな！

「あぁそのことか、安部お前うちに来ないか？」

うちに来ないか……まるで友達を誘うような軽さで言いますね

「えっと、なぜそうなるかわからないんですが……」

「お前はこれからＴＶで大々的に発表されるだろう、そうなるとマスコミなどが家まで押し寄せるだろう。」

まぁそうだろうな、でもしかしそれって

「それは先生の所も同じなのでは？」

これは巧が言った

「それにまだ俺学校ありますし…」

これは俺

それと学校帰りに他人の家に行くのはあまり好きではないのだ

せめて着替えてから行きたいものだ

「幸い私は顔が広くてな、私の家にはマスコミは少ないだろうな。学校については何かしか学校側から発表があるだろう」

少ない　いないが一番の理想だが仕方ない

学校は…面倒だ、としか言えない

「まぁ俺は構わないかな、むしろ織斑一夏と先に交友関係を築いておけるのはありがたいし」

もしクラスが違った時でも先に知り合いなら困らないしな

「なら決定だな、私はこの後職員室に戻って荷物を取ってくる。お前は校門で待っていてくれ」

「え？！今からですか？！授業は？！つか今日からなんですか？！」

「今日からの方がいいだろうな。仕事は副担任のものに任せてある大丈夫だ」

うぇいwお仕事がお早い人だなw

「荷物は相沢兄に届けてもらうのがいいだろう」

「と、言うことは俺もついていくんですね」

なにか巧を巻き込んでしまったようだ

「なんかすまんな巧」

「良いっての、友達だろ」

そう言いながら悪友が笑う

まったく、最高のともをもったものだ

０３（後書き）

ＨＰが半分減った

レベルが１上がった……特に意味がなかったｗ

今回ｇｄｇｄでした…えぇ自分でよ～くわかりました…

負けてたまるかぁ～～～！！！！

吠えたことによりＨＰが減った……ぐはっ！

04

あの後はモノレールとか電車で織斑家へとたどり着いて意外と家が近いことに驚いたんだ
まぁ藍越高校に通うために受験会場行ったはずだったって一夏から聞いたしな、そりゃ案外近いし
聞けば中学は実は一緒だったらしい
まぁそんなこんなで「レイちゃんってば」家についてからも大変だ……？ん？俺はそんな家には言ってないぞ？

「えへ？私を無視するレイちゃんにはキ、キスをしてあげます」

あぁそうだった……俺は現実から逃げているとこだった……
それよりも今は

「こら悠、何をしようとしているんだ」

「何ってキスだよ、そのあとは行けるとこまで行こうと思ってました～」

元気よく手をあげながら宣言する
まぁ悠は巧と違って宣言したって大丈夫だがな

しかしこいつレベルアップしたな……1年会わないでこんなにも

「成長するなんて？」

腕を組んで胸を強調させてくる
ゴクリッ！た、確かにデカくって何をやってるんだ俺は！

「人の心を読むな悠」

「大丈夫だよ〜、レイちゃんにしか使いたくないし」

「俺にだって使うなっての……」

「だって女の子しかいないから大丈夫かなって心配になって確かめてたら私の胸の成長を確かめてるし、まぁ他の子の見てたら切っちゃうんだけどね」

手をチョキにしてハサミのように動かしている

何！何を！ナニを切っちゃうんですか？！

慌てて息子を手で押さえる

「冗談だってw」

wじゃね〜し！マジでビビったわ！

「まったく、ある意味疲れた……でも助かったぞ悠、お前と話したおかげで大分楽にはなったしわざわざ学年が違うのに来てくれたんだろ？ありがとうな、それと久しぶり」

「えへ、久しぶりだねレイちゃん。もうちょっと話したいところなんだけど次の授業始まるから行くね」

「あぁ、またな悠」

そう言って教室から出て行こうと扉までいくとこちらに振り返り

「私今日はＩＳの授業で放課後までこれないんだ、だから放課後はこの教室で待っててね」

言うだけ言って返事を返す前に教室から出て行った悠

「まったく…毎回来るつもりだったのか」

キーンコーンカーンコーン

おっと、2時間目の鐘がなったな

隣の席を見るとまだ一夏は帰って来ていない

と、一夏と一夏に声をかけた女の子が帰って来た

俺は席に着く一夏に対して

「あの子お前の彼女か？」

「違うって幼馴染だよ」

ギロリ！

おおぉｗ睨んでるｗあの子めっさ一夏睨んでるｗこれは楽しくなりそうだｗ

「くすくす、一夏あの子めっちゃ睨んでるぞ」

後ろを向く一夏

「ええ！ちょ、なんでだよ箒」

立ち上がり女の子に抗議する一夏
ふむ、彼女は箒って言うのか
ちなみに一夏……今立つとだな

パァンッ！

「席に着け織斑」

「……わかりました」

くっくっくwたのし～なぁw

パァンッ！

「だからなんで叩くんですか？！俺なんもしてね～！」

「いや……女の匂いがしてな……まぁ気にするな……」

「理不尽だ！！！！！」

「さて授業を始める、山田君頼む」

「無視？！無視なの？！無視」パァンッ！

「うるさい、静かにしろ」

「……ヤー」

◇

「――――であるかにして、ＩＳの基本運用は・・・・・・」

眠い、内容がわかるだけに眠い……もう、寝てもいいよね？

「あ、あの阿部君、織斑君、私の授業つまんないでしょうか？」

ん？一夏…お前も眠いのか

「いや…先生のっていうか内容が内容だから眠いんですよ」

俺の意見に同意するようにうなずいている一夏

ゴン！ゴン！

「「ぐはっ！」」

ゲンコツがきた？！出席簿じゃなかった？！

「誰が正直に言えといった」

「えぇ～、だってあの天才ウサギに徹底的に教え込まれたんですよ～」

「俺は零時から復讐を込められて、いやいや教えられたし」

当たり前の復讐だ、一夏が動かさなきゃこんな難しいこと覚えずにすんだんだからな

「それでも授業はちゃんと受けろ、それともお前たちが授業をしてくれるのか？」

「「いえ、滅相もございません」」

「ならちゃんと聞いていろ」

「了解」
→一夏

「ヤー」
→俺

「そういやなんで零時ってヤーって言うんだ？」

「ゲームで染まってそのまま気に入ったから使ってる、結構ミリタリー要素あっておもろいぞ。他にも面白いの知ってるぞ」

「へー、なんてゲームなんだ？」

「ＢＡＬＤＲ　〇〇〇　シリーズだ、まっ１８禁だがな」

パァンッ！

「没収だ」

「男の子を殺す気?！」

「没収だ」

「うさぎにもう没収されてる」

「初めて友人を褒めたい……」

うは、そんなことで初めて褒めるんかい

「まぁいい、とりあえず話は聞け、お前たちは玩具ではなく兵器を扱うことになるんだからな」

そうだ、ＩＳ兵器だ
協定とか条約とかで結局競技をするため、とか言っているが軍事ＩＳがあるって噂もある
そして俺たちはそのＩＳを扱っていくのだ

「えぇ、わかりました」

気持ち切り替えて聞かないとな

「……それでいい」

◇

そして二時間目の昼休み時間

「へ？」

おっと、金髪少女だ

ふむ、悪くない

一夏が知り合い？みたいな顔をしてくるから首を振って否定した

「なんだ、何か用事か？」

「まぁ！なんですのそのお返事、わたくしに声をかけられるだけでも光栄ですのよ」

訂正が必要だ、全然よくない

ゲーム内以外ではあまり関わりたくないタイプだ

「光栄ねぇ……お前より千冬先生に声をかけてもらう方が光栄だね」

「そうか？」

「お前にとっては姉だからそこんところの感覚は薄いかもな」

「そうかも、それと悪いけど俺たち君の事誰か知らないんだ」

知らない奴に声かけられて「光栄です！」ってなる方が頭おかしいだろ普通

「まぁ！わたくしを知らないんですの？！イギリス代表候補生にして入試主席のこのセシリア・オルコットを？！」

ほ～、候補生か
ってことは専用機持ちかな？

「お前候補生ってことは専用機持ってんのか？」

お、一夏ナイス

「えぇ、もちろんです。国家代表ＩＳ操縦者の候補生の選出されたエリートなのですから、本来ならば私とクラスを共にするだけで幸運ですのよ」

腰に手を当て胸を張って答えるセシ…リアだっけ？

「そうかそうかよかったよかったー」

よし適当に流そうｗ
たく…今になって二年に行けばよかったと思うぜ
なんか悠のありがたみがよくわかる瞬間だぜ

「馬鹿にしてますの」

しまった、流せないタイプだったか
アイコンタクトで「おい、一夏何とかしろ」と一夏に伝える

返事は「無理無理」だった
くそ～、なんでこんな時来ないんだよ悠！！って授業で来ないって

言ってたな

「大体ちょっとＩＳの事を知ってるだけでよくこの学園に入れましたね。男でＩＳを使えると聞いていましたから期待していましたのに期待外れですわ」

「俺たちに期待されてもなぁ零時」

こっちに話し振るなバカチン

「まぁ～な～」

「まぁ私は唯一教官を倒したぐらい優秀ですからわからないことがあれば聞いてください」

唯一ねぇ…

「おい一夏、お前も教官倒したんだろ？」

「いや倒したっていうか勝手に負けてくれたって言うか……」

「は？」

おおぉｗ美人のアホずらｗ

まぁさっきまで馬鹿にしてたやつが自分と同じって言うんだから驚きだよな

「あなたも教官を倒したっていうの？！私だけと聞きましたが？」

「女子ではってことじゃないかな？」

「あなたもですの！？」

今度は俺か…だが俺は

「俺はそもそも入試試験をやってない」

そんな俺には興味がなくなったのかまた一夏の方を向く

「あなたも教官を倒したっていうのですね！」

「お、落ち着けよ」

「これが落ち着いて」キーンコーンカーンコーン

ジャストタイミング！助かった

「またあとできますわ！」

おいおいまたくんのかよ…悠に助けてとでもメールしようか……いやそのあとが大変そうだ

０４（後書き）

「」ばっかになってしまった・・・・・・どうしよう

ちなみにＩＳにはいろいろなものから武器名とかを引っ張ってきて皆さんにわかりやすいようにするかもしれません

内容はネタはだしてもクロスは多分しません

０５（前書き）

遅くなりました～（泣

しかも短いです（汗

グダリました（困

ではどうぞ（ｗ

05

「それではこの三時間目は各種装備の説明をする、が、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

クラス対抗戦？代表？
理解した、めんどくさいんだな
よし、俺は絶対にやりたくない

「クラス代表とはそのままの意味で、対抗戦だけじゃなくて生徒会の開く会議や委員会への出席もしてもらう。ちなみに決まると一年間変更はないからそのつもりで」

よし、さらに面倒なのはわかった

「自薦他薦は問わない、他薦された者に拒否権はない」

拒否権がないだと？！
ならば先手必勝！

「はい、先生！セシリア・オルコットを推薦します！」

そしてクラスメイトに向けて殺気……目で威圧する
これできっと！大丈夫だ！

「はい、俺は零時を推薦「きさまぁぁぁ！！！！！」うおっ！な、なんだよ零時」

あぁ……やってくれた……

まさかこんなところに裏切り者が……
なぜ、俺は…一夏どうしてこうも……

「なんてことしやがる一夏！貴様！貴様ぁ～！」

「くそ！なら俺は一夏を推薦します」

「ええぇ、お前こそなんだよ零時」

「うっせ！お前が悪い」

バァン！

「待ってください、納得がいきませんわ！」

先ほどの音は机を叩いて立った時の音のようだ

「うるさいセシリア・オルコット！どうせ俺たちがクラス代表が気に食わなくて……違うか…男が代表になること自体が屈辱とかどうせ思ってんだろ、んで実力の高い自分がなるべきとも思ってんだろ」

まったく……今どきの女子だ
俺は高校はいるまで会ったことがなかったが今の女子は、ＩＳが使えるのは女子＝女の子って偉い……って思考だ

「えぇそうですわ、わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来たのであってサーカスをしに来たのではありません、だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなければならないこと自体苦痛であると――」

「イギリスだって大してお国柄ないだろ、世界一まずい料理で何年覇者だよ」

お、一夏も参戦してきたか
口が滑ったみたいな顔してるし

「あ、あなたねぇ！わたくしの祖国を侮辱しますの？！」

「お前バカだろ、先にそっちが馬鹿にしてきたから一夏も怒ったんだろ。それともついさっき言った自分の言葉さえも忘れたのか？」

バァン！

そのいちいち机叩くのやめてほしいわ～

「決闘ですわ！」

「おう！四の五の言うよりわかりやすい」

一夏も勝手に決めるなっての……
ふむ、これはもしや負けたらプライドが…勝つと代表になってしまうってところか……わざと負けるか？いやいや、仮にも年上……負けるわけには……というかこのまま空気になればきっと俺は戦わないですみそうだな

「言っておきますけどわざと負けたりしたら奴隷にしてあげますわ！」

それは前に二文字つく奴隷ですか？

「そんな事わかってる」

「さて、そろそろ良いだろう、勝負は一週間後に第三アリーナで行う。織斑・安部・オルコットの三人はそれぞれ用意しておくように」

「えっ？！俺もですか？！一夏たちが勝手に決めた事じゃないですか」

「束との約束を果たすチャンスじゃないか、それにお前の腕についているそれは飾りか？」

そう言って千冬さん……千冬先生は俺の両腕についているリストバンドを見てくる

「ん～、でも使うなって千冬先生が言ったから使ったことないし……でもずっと着けてろって言うし、つか隠しとけとも言ってませんでした？」

このリストバンドは貰いものだ、くれた本人は「はいこれあげる、レイちゃんが本当に変わりたいと思うなら使うといいよ。こっちの青の方は君のＰＣの中身にあったゲームを参考にしてるから特に説明はいらないね、こっちの紫の方は……まぁレイちゃんが私に約束したことを守れていたらきっとこの子が教えてくれるよ」と言っていた

「ＩＳ学園は特記事項があるから国・団体が関われないからな、ここでなら多少なら構わない。それにそれは現行あるコアではなくお前のためにあるコアだからな、４６７のコアが４６９になった報告もしなければならんのだ」

ふむ、外でそんなことあったらコアを持っていかれそうだしな
俺の憧れ、俺を応援をしてあげると言ってくれた人からもらったものだ
渡すわけにはいかなかったから助かった

「腕試しと思ってやってみろ」

「わかりました」

ん？今気付いたが教室がざわついてるな

「聞きたいことがあるかもしれないが後で聞け、では授業を始める」

なるほど、コアが増えた～みたいな話ししたから当然の反応か

◇

授業が終わった休み時間はセシリア・オルコットからの質問攻めがすごかった

「あなたも専用機持ちだというのですか？！」とか「なぜ二つも？！」とか……おっと何故二つとかの説明しなかったな

なんか俺の前でまだ質問を言ってるし……俺が答える前に質問するなっての

さて……現実逃避するかw
ついでにこのリストバンドの形をした待機状態のＩＳをもらった時の話しを思い出すか…

そうそうあれは、俺が一夏の家に泊まりが決定して親に「平均のお前が……頑張ってこいと」微妙なことを言われながら応援された次の日だ
朝起きて飯食ってゆったりしてた時だ　ちなみに俺は学校を休んで一夏は自由登校だったから家に居た、千冬さんも今日は休みを取ってくれて家にいた

ピンポ～ン！

織斑家のインターホンがなり一夏が玄関向かった時玄関から

「やっほ～！ちーちゃん、いっくん久しぶり～」

かなり注目を浴びるような服装をした女性が無断侵入してきたのだ
そのあとは一夏と千冬さんの昔からの知り合いで、とか紹介をしてもらい
その女性の名前を聞いて驚いた

「挨拶をしろ束」

「ええぇ、しょうがないなぁ…私が天才の篠ノ之束さんだよ～」

簡単な挨拶だった
しかしこの人がＩＳを作った人だとわかったのは驚いた
「君がいっくん意外にＩＳを動かせる子かな？」
「え？あ、はい、安部零時って言います」
「ふ～ん、どうして君はＩＳが使えるんだろうね？だから君の事を少し調べさせてもらたよ」
何がだからなのかさっぱりだ
しかも千冬さんと一夏は俺と篠ノ之さんを見比べて驚いている
「君は面白い体質みたいだね、ここまで平均的だなんてすごいね。でも君は小学生の低学年は普通…むしろ成績が良かった方なのに年齢が上がるごとに平均的になっていったね。なにか理由があるのかい？」
「小学低学年……」
はて…何かあったかな…
ピンポ～ン！
む？またお客さんか？この家には良くお客さんが来るようだ
一夏が玄関に向かって行った
「今日は多い方だ、おそらく相沢兄ではないのか？」
また読まれただと？！千冬さんは人間なのか？！

すると玄関から

「お～い零時～、荷物持ってきたぞ～」

よく知る友人の声だ

「せっかくだ、用事がないならば上がってこい」

千冬さんがリビングから声をかける

「んじゃ、おじゃましま～す」

やはり来たのは巧でまた自己紹介をした後

「本当に何か心当たりはないの？」

と、先ほどの質問をまたされた

「ん～……ない…ですかねぇ」

むしろ覚えてるならこんなことにはなっていないだろう

でもなぜかこう頭に…モヤがかかってハッキリしないが何かあったような気はするが……覚えてないということは大したことではないのだろう

「ん？どういうことなんだ零時？」

そうか、巧はいなかったんだ

そこで聞かれたことを教えると

「……篠ノ之博士、少し二人でお話ししませんか？」

「イヤだね」

なんと？！即答だと？！このイケメンのタクミンが女性に断られるとこを俺は初めてみた！

しかし同時に巧のこれほどまでに真剣な顔は初めて見た

「では零時への質問はやめていただきたい」

おいおい、ドスのきいた声出すなよ

「というか何故お前が決めるんだよ」

「黙っていろ零時」

「はい」

情けないぞ俺！！こ、こここここ怖くかったわけじゃないんだからね！

「君は何か知っているの？」

「えぇ、知っています。零時は覚えてないだけ…そう覚えてないんだ……」

「じゃあ少し話そうか、外…でいいかな？」

「その方が助かります」

そう言って外へ出て行ってしまった

「……ちょ！本人の俺に教えてくれたっていいじゃなイカ？！」

「それにしてもあの束がな……昨日話した時から興味はあったみたいだがな…まさか今日来るとはな」

「だよなぁ～あの束さんがなぁ～」

なんだ？その「あの束」って言うには何かの暗号なのか？

「なんすかそのあの束がって」

「あれは極端に人見知りでしかも興味を持った人間にしか相手の事を知りたがったりしないんだ」

「俺と千冬姉は昔束さんとこの道場に行っててそれで幼馴染なんだ、それで正直言って俺と千冬姉と束さんの妹意外に束さんが興味を持った人がいないから驚いてたんだ」

「興味ねぇ……俺のどこに興味を持つ要素があるんだか…」

平均と半分

要するに平凡の極みだ

ＩＳを作れるような天才が興味を持つと思えない

「天才ゆえの興味だろう。それに平均と言うがある意味天才じゃないか、例えばＩＳのコアを作れるのは束だけだ…ということは平均的に見ればＩＳを作れるのは１００％と言うことになる、だから束に作り方を教わればお前もコアが作れると私は思う、ゆえに天才と

いうわけだ」

「それは良い考えだねちーちゃん、ねぇレイちゃん私の助手にならない？」

「レイちゃん……？」

一瞬悠かと思ったが博士が言ったのか……

「興味を持っているのは確定したな」

「何を冷静に分析してるんですか千冬さん？！」

ちなみにこの千冬さんって呼び方は仮にも家で居候として過ごしていくのだから先生と呼ぶのはやめよう的になったのだってそんなことは今は良いんだ！

「じょ…助手？巧…博士に「束さんって呼んで」はかｓ「束」……束さんに何を言ったんだ」

「俺は事実を言っただけだ」

「答えになっとらんわ！！」

「それよりもどう？なってみない？ＩＳ学園は普通に通ってもらって良いから卒業したら手伝ってよ」

わからん…この人は何を言ってるんだろうか……手伝い？助手？俺にできるとは思えない

「俺にできるとは思えないのでお断りさせてもらいます」

「そうかな？レイちゃんは一回目ＩＳに触れても起動しなかったのに二回目は起動したんだよね？」

そうだ、俺は巧にいろいろ言われてＩＳを起動させたんだ

「人類の半分は動かせるって思ってたら起動したんだよね？」

「えぇ、そこの友人に言われ意識したらいつの間にか」

「じゃあそれって一回目のときにも意識してたのかな？」

詳しくは覚えてないがそんな事考えながら触ってなかっただろうな

「いいえ」

「じゃあ二回目は意識したとたん起動したんだよね？」

「はい、そうですね。誘導尋問みたいにされてたらいつの間にかですね」

「ということは君の考え方が変わったら起動したってことになるよね？」

「まぁ…そうなりますかね？」

「じゃあ君が考え方を変えれば平均以上になんでもできるんじゃないかな？」

考え方？そんな簡単なことじゃないだろ

第一考え方変えるだけなら

「人の考え方がそんな簡単に変わるなら俺だって何とかしてますよ……」

「そうだね、人の考えを…意思を変えることは難しいね、でも君はＩＳをたった数分で考えを変えて動かしたよ」

「それは…きっと初めての事でまだ考えがはっきりしてなかったから…」

ＩＳを触ったの何てあれが初めてだし

動かそうなんて考えたのはあの時ぐらいかもしれん

「ならＩＳの事ならまだ平均じゃなくなる可能性があるじゃないか。それに君は平均的なのを無意識で実行している気がする、それができるのは天才だからこそだと私は思うよ」

平均じゃない……それは長年思い続けてきたことだ
でも真剣に直そうとしたことはない…かもしれない
巧と悠に何度も「直そう」と言われて一度真剣に！真剣に！真剣に！いろいろとやったが悲しい結果…変わらなかったのだ
天才？この俺が？笑える冗談だ
でも…この人の真剣な顔で言われると嬉しくないわけがない

「もう一度聞くよ、私の助手にならない？」

どうすればいいかわからない…平均的で困ったことはない…
でもＩＳを動かした時点で世間的に見れば俺はもう平均的ではないのだろう

「物は試しだぞ零時、せっかく天才の博士からの誘いなんだ。俺もお前は天才だと思う。それにせっかくのチャンスだ、前は失敗したからってもう努力しないって理由にはならないだろ」

友人からの後押し
こいつは俺に嘘はつかない　悠関係になると平気でつくが…

「やって……見ようかな…、俺…頑張ってみるよ、もう一度頑張ってみるよ」

「うんうん！それがいいよ！」

がばっと俺を抱きしめてくる束さん
ココは桃源郷ですか？二つのおｐ

「悠には報告しといてやる」

すかさず束さんから離れる
……俺の人生はここで終わるようだ

「冗談だ」

もっと感じてたかったのに！！

「じゃあ私は今日はこれで帰るよ、また明日ね」

誰かが何か言う前に出て行ってしまった

「まぁなんだ安部…大変だと思うがアイツの相手は頼むぞ」

「はぁ」

もうなんか生返事しかできなかった

０５（後書き）

テストやばいｗ

３点ｗｗｗｗｗ

次回はこのまま

現実逃避のお話の続きですｗ

06

朝目が覚めるとそこは見知らぬとこだった

「ってわけでもないか」

ココは織斑家、ＩＳを動かしてからお世話になっている家だ

でも二日目だがな

「今日はまたはかｓ…束さんが来るんだっけな」

ピンポ～ン！

「お？来たのか？」

現在俺はリビングで布団を借りて寝ている

すなわち俺がきっと一番に反応できるはず

だから玄関に向かおうとすると

「ん？なんだ起きていたのか、私が出るから顔でも洗ってこい」

スーツ姿の千冬さんに会い

俺は言われた通りに顔を洗いに行った

そしてリビングに戻ると

「おお零時、お前のノーパソとゲーム類もってきてやったぞ」

来たのは束さんではなく巧だったようだ

渡されたボストンバックの中身をみるとＰＣとＰＳＰにＰＳ３まであった

「お前昨日もそうだったが学校はどうしたんだ」

「そうだな、私も教師として聞きたいな」

そういや千冬さんは先生だっけ

「昨日は休んだ、ちゃんと連絡もした、今日はちゃんといくさ、でも行く前に荷物持って来たんだ、んじゃ渡したから行くな」

「待て貴様……今気づいたらどうやって俺の私物を持って来れたんだ」

「んなのお前の母親に言ったからだよ」

「そうか…やましいことはしていないな」

「そうだな……ベットの下の本の内容を全部悠言ったぐらいだな、意外にマニアックで悠もさすがに驚いていたな」

俺のプライベート返せ！ＩＳを動かす前に戻りたいよ！

くそ～！泣けてきちまうぜ！

「さて、私は仕事に行く。お前もそろそろ急がないとではないのか相沢兄」

「おっと、ではまたな零時」

まったく去り際もイケメンでむかつく……今度悪意を込めてハンサムと呼んでやろうかな

「私も行ってくる」

今度は千冬さんの出勤だ

「今日は帰って来ない、明日の夜には帰ってくる」

「昨日も休んでもらったし、何かすみません」

「お前が気に病むことではない、留守を頼むぞ。」

「わかりました、いってらっしゃい千冬さん」

ああ、と言って仕事…ＩＳ学園へと向かって行った

リビングへ戻って飲み物を飲んでＴＶを見ていると

「やっほ～レイちゃん！「ブッ！」たば…ねさん……だよ」

しまった！驚いて飲み物吹き出しちまった…束さんに向かって…

「ふぁあ～おはようたばね…さ…ん」

やっと起きたか一夏

「ふぇ～ん、いっく～ん、レイちゃんに穢されたよ～」

「いや穢されたって…すみませんでした、でも束さんもいきなり入ってきて脅かすのが悪いんですよ」

「とりあえずシャワー行って来たらどうですか束さん？」

「うぅ～……そうするよ」

洗面所に向かって行く束さんを見届けリビングに戻り
巧に届けてもらった中身を確認する

「俺の趣味をわかってんなアイツ」

持って来たゲームは大体アクション
でもアクション&ホラー系はない
例えばバイオとかバイオとかバイオとか……
友達とかに怖くない怖くないって言われるが……怖いもんは怖いんだよ……
だって怖いのムリだし…

PCの方はBALDR系そろっててナイスだ
AGE作品もあるしなw
テスト前に佐渡島攻略してテンションあげるのって常識でしょ？
まぁそんなのは俺だけかもしれないが……

PS3もちゃんとコントローラー二つあるし一夏と何かやるか

「なぁ一夏、PS3あるんだがなんかやらないか？」

「おっ！マジですか？！やりたいです」

「カセットそのバッグに入ってるから好きなの選んで。それとだ一夏、俺たちもう友達だろ？敬語なんてやめてくれよ、それに俺は居

候だし敬語だとなんか居づらくなっちまう」

「そうです…そうだな、じゃあ好きなの選ばせてもらうな零時」

「おう、その中の大体俺は終わってるし、一人プレイのでも良いぞ、見てるだけでも楽しいしな」

「ん～…零時のおすすめってなんだ？」

「そうだなぁ～、俺はロボ系好きだからなぁ……アマコアとかどうだ？」

４でも良いがやっぱ俺はｆａかな

オペコさんの声聞くためにわざわざ死んだりしてたし

「あの操作難しいってやつ？」

「難しいのは最初だけだよ、それにＰＳ２のアマコアの方が難しいって、だからそのアマコアｆａは難しくないって」

「ならそれにするよ」

そういってアマコアを始めた一夏

「へ～、こんなの考える人がいるんだね」

「束さん、出てきたんですか」

出てきた束さんの髪は濡れていてなんだかいい匂いまでしてくる

「ゲームもなかなかなんですよ、試に今度やってみたらどうですか？」

「まぁ考えておくよ」

そのあとは勉強だ、もちろんＩＳのだ
正直束さんは人が変わったように厳しく教えてきた
その反面顔はとてもうれしそうにしているのだからここで頑張らなきゃいけないと思い必死に覚えていった

時刻は過ぎて夕方

「……俺の頭が…熱暴走する…」

休憩と言われリビングのソファーにダイブする

「お疲れ零時」

そう言って労わってくれる一夏
しかし彼の目線はＴＶに向いている

「まだアマコアやってたのか……人が頑張ってたのに…」

「いや～はまっちまってさ～、今ホワイト・グリントのとこ」

「水没してしまえ！はぁ～……ちゃんと覚えられてるのかな俺…理解はできてても束さん相手だと自分が平凡すぎて困る……」

「安心しろ、ここからでも聞こえたが意味が分からなかったからきっと理解できてればできてるって」

そんなもんかなぁ…、お！水没した

「うわぁw俺一人とかマジかよ、勝てなくね？」

とか言っているがちゃんとミサイルもかわしているいる一夏

「おぉ～いレイちゃん始めるよ～」

まだ5分しかたってないのに…

「が、頑張れ零時」

「……おう」

それからはまた勉強

次はＩＳの武器に関してだった

量子変換とかウンちゃらカンちゃらだった

夕飯の時間になると一夏が作ってくれたカレーを3人で食べた

「うま！お前料理うまいんだな一夏」

「まぁ千冬姉ぇがいない時自分で作るしね。というか千冬姉ぇが料理できないから覚えたともいえるね」

「それちーちゃんに報告しちゃおっと」

「そんなぁ～」

とまぁこんな感じで食べた後束さんは帰り
一夏はまたゲームを始め
俺は疲れたからとっとと寝た

それからの日々は勉強の日々だった

そして一週間後

「束さんが教えてあげられるのはこのくらいかな」

「ありがとうございました」

自分がどのくらい身につけられたかわからんが束さんに教えてもらえて良かったと思う

「む、束さんが教えたんだから自分に自信を持つように」

って言われても正直無理だろう
束さん相手じゃ自信つかないって

「どれ、私がテストしてやろう」

そう言って学校から帰って来た千冬さんが言う

「うんうん、それがいいね」

そんな感じで始まったテスト

「そうだな。ＩＳのコアネットについて説明してみろ」
「ＩＳのコアはそれぞれ相互情報交換の――――――自己発達の糧として吸収もしている。これは束さんが情報交換を無制限にして自己発達一環とした……だから今現在も進化し続けているから全容は掴めていない。でしたっけ？」
「あぁあっている。むしろ優秀な方だ」
やった！あってた！しかも千冬さん褒められた
「次は――――――」
といくつか質問された
「ふむ、正解だ。」
「スゲーな零時、俺でも理解できる内容で助かった。お前先生とか向いてるかもしれないな」
そう言って一夏が褒めてくれる
正直言えば嬉しい
「先生か…お前卒業したらＩＳ学園の先生にならないか？」
先生か……自信ないな……それに
「それって千冬さんが楽したいだけじゃないんですか？」

「あぁそうだ、だが悪い話じゃない。ＩＳ学園なら外的介入を原則として許されていない、つまり国家・企業・団体から実験体にならないか？という誘いが来ないわけだ」

うっ…正直言えば実験体なんて御免だ

でも……俺は世間に出ようとしても留年する身だ……あまりよくはない……

「今はわかんないです」

「まぁ３年間考えることだ。」

「じゃあ次束さんが出していいかな？」

「はい、どうぞ」

束さんからのか…どれだけむずかしいのだろう

「レイちゃんはどんなＩＳが一番強いと思う？」

はい？問題というより質問なような・・・

「ん～、ＩＳを乗っ取れるＩＳとか？あとは…物量かなぁ…ビットとかじゃなくて…ＮＰＣみたいに個人んで動くＩＳとか？まぁでもＩＳは人がいなきゃ動かないんでしたよね？」

「ふ～ん…ありがとう、束さんはもういいかな」

「そうか、テストは終わりだ。どうだ自信の方は？」

「それは大丈夫です、自信つきました。むしろ平均じゃないことなんて久しぶりにできて感動してますよ」

「レイちゃんはやればできる子で、自分で自分を平均にしちゃってるんだよ。前にも言ったけ、これからは考え方を変えて行けばいいんだよ。例えば”平均的にすべてできる”とか”平均以上にできる”って最初はこんな風にしていけばきっとできるよ」

そういって束さんは笑いながら言ってくる
その笑顔に一瞬ドキッ！っとしてしまった

「そう…ですね……俺約束します。きっと平均とか半分とかにとらわれないようになるって、束さんの助手として恥をかかないように頑張ってみます」

「頑張ってね」

そう言って今日は帰っていった束さん

07

翌日の朝5時

朝っぱらからパソゲして遊んでいる俺

「レインさんかっくいい……サポートってやっぱいいよなぁ」

俺は戦闘ゲームなんかはサポート役が超大好きだ

いろんなゲームしてきたが、とりあえず俺には接近戦とか前線で戦う系のキャラとかは全然使えなかった

スナイパーとか壁役に回復役はまぁまぁできる方だった

今やってる”ＢＡＬＤＲ　ＳＫＹ”のサポートは憧れる

こんなタイプのジョブキャラがあったら一番に選択してるな

このゲームのサポートは簡単に言うと敵の視覚やレーダをかく乱させて自分を認識させないとかいろいろだ

「ハッキングとかもあったよな～……ＩＳにこんな機能あったら良いのに……」

「ふ～ん…レイちゃんが昨日言ってたＩＳはこのゲームが元なんだね」

「そうですね、でもサポートはあくまでサポート。前衛が居てこそ……って！束さん？！いつも間に？！ってか今日は早いですね」

いつの間にか後ろにいる束さん

「レイちゃんはサポートが好きなの？」

いつもなら１０時くらいに来るというのに今日はやけにはやい

「え、えぇまぁ好きですね」

「このゲーム貸して」

ヒョイっと返事をする前のノートパソコンごと取り上げる束さん

「あ、ちょ束さん」

「2～3日したら返しに来るから、それまで勉強はお休みね」

たたた～と玄関に向かい扉のあける音と閉まる音が聞こえた

「一体何しに来たんだか……いやしかし！これで束さんがあれをもとにＩＳを作ってくれれば！キタコレ！ｗｗ」

なんてテンションが上がってると

パァン！

おう？！突然頭に衝撃が来たから振り返ると

「朝からうるさい！近所迷惑だ！」

そこにはおｎ…ｉ…ゲフンゲフン

スーツを着た千冬さんが立っていた

「すみません、束さんがさっきいたものですから」

「束が？インターホンも鳴らさずに……」

「ま、まぁそれこそ近所迷惑になるから鳴らさなかった……とか？」

「それでもれっきとした不法侵入罪だ」

「ですよね～、もうお出かけになるんですか？」

スーツ姿ってことはそうだろうが今は5時半前
ちょっと早いような気がする

「仕事が溜まっていてな」

首に手を置いて
疲れている表情をする千冬さん

「……その…頑張ってください」

俺のせいで…とかよりもきっと応援した方がいい気がして頑張って
と言った

「あぁ……そうだ、お前今日は学校に行ってみたらどうだ？そろそ
ろマスコミも大丈夫だろう、帰りに親御さんに会ってきても良いし
そのまま帰って来なくても構わないぞ」

「学校…（やべ、すっかり忘れてた）……帰って来なくてもいいん

ですか？」

「言い方が悪かったな。家に帰っても良いぞという意味だ。もちろんこの家に帰って来ても構わない」

「親には悪いけどたぶんこの織斑家に帰ってきます、ただ……一泊向こうで泊まってきます、束さんも2～3日勉強は無しって言ってました」

「もう教えることはない…と言っていたような気がするが……まぁ束には束の考えがあるんだろうな。泊まってくるのは構わない、親御さんとゆっくり過ごすといい」

「了解しました」

そうして千冬さんが仕事に行き
巧が持って来た制服に着替え
一夏に事情を話す

「ゲーム類とか置いていくから好きに使って良いから」

「わかった、零時が帰ってくる前にアマコアの虐殺ルート終わらせとくよ」

「もちろんハードの…だよな？」

「も、もちろんだ……たぶん」

「あはは、まぁ頑張ってくれ、じゃ行ってくる」

「あぁ行ってらっしゃい」

男に見送りされるとは……くっ！

◇

ここは高校

藍越高校の俺のクラス

「よっ零時、今日は来たんだな」

何やら自分の名前が呼ばれたような気がする

が

ココは無視

「悠に織斑先生と同棲していると伝えておこう」

い、いずればれることだ……ここで「それだけはやめろ！」となったところで巧に良いように使われそうだ
だからここは

「好きにすれば、俺はやましいことはしていない」

「わかった…残念だ……悠か？兄だ、今零時は織斑先生の家に同棲していてな……零時が卒業したそうだ…」

携帯で電話をしている相手は悠だろう
いつも気になるのだがいちいち妹に報告をする兄って……まぁ何も言わないでおこう

しかし

イッタイナニヲソツギョウシタノダロウカ？

「ちょ！巧！言いがかりはよせ！」

巧に掴みかかろうとすると

「うそだ」

そう言って携帯の画面を見せてくる

「ま、待ち受け画面…だましたな！」

「日頃の行いが悪いんじゃないのか？」

あははは、とクラスメイトから笑いが起きる

「まぁこれでみんなも変に意識しないでいられるだろ」

巧はそういった

俺はわからなかったがきっとクラスのみんなが俺に遠慮みたいなものを巧は感じ取っていたのかもしれない……たぶん

そんなこんなでいつも…ＩＳを動かす前の学校生活を過ごした

そして三日後

◇

「やぁレイちゃん」

今日は日曜日です

そしていい天気です

たぶん

「今何時だと思ってるんですか束さん…」

まだ外が暗い……時計を見てみると
現時刻……４時！？

「ちょ…はや～」

「いや～ゲーム終わってこの感動のまま来ちゃって束さんテンションあがりまくりだよ～」

その言葉を聞き
ガバッ！布団からっと立ち上がる

「終わったんですね…？」

「うん…終わったよ……」

「ちなみに感想は？」

サムズアップをしながら良い笑顔をしてくる束さん

「ですよね！ちなみに束さんは誰押しですか？」

「ノインツェーン…って言いたいけどあまりいい性格じゃないから
橘　聖良かな」

やっぱり技術者として思うところがあるのだろうか

「ちなみにこのＰＣに入ってる物は大体見させてもらったから」

おおおう……中身を見られたってことですね　ｏｒｚ
女性に見られるのは抵抗が…

「興味深いものばかりだったよ、マブラヴなんかもそうだったね。レイちゃんのおかげで世界への考えかたが少し変わったよ」

「そ…そうですか…」

いつもならプレイしたきたものに対して意見を言いやってさらにそのゲームの良さをお互いに言い合うのだが……どうやら中身を見られたことに対してダメージがあってテンションがあがらない…

「そして束さんはゲームをもとにＩＳを作ってみました」

07（後書き）

いろんなゲーム出てますが登場人物としては出てきません

０８（前書き）

テスト期間・・・・・１０単位ほど落としたかな・・・・・・

08

「はい束さん質問です！」

元気よく手をあげる
ここ重要ね
たぶん

「はいレイちゃん！」

ビシッ！っと指を差された

「それはつまり４６７コのＩＳのコアが４６８コになったということでしょうか？」

「ううん、違うよ」

首を振って否定する束さん

ってことは盗んできた！？
ってそれはないか…自分で作れるのに何で盗む必要があるんだか
でもそれならどうして？

「４６８コじゃなくて４６９コになったんだよ」

そうかそうか…一個じゃなくて二つ増えたからか……って！ＩＳの事を学んだ今の俺にはわかる！このたった一つが国一つを滅ぼすことができるほど恐ろしいものだと…
それが二つも！二つも増えた？！

ダッシュをして千冬さんの部屋へと突撃する
昨日たまたま帰って来ていたのはこのためかもしれない！
しかし部屋の主はまだ寝ていた
起きていて着替えていたってラッキースケベがないが今は仕方ない！

「起きてください千冬さん！」

ゆさゆさと体を揺らして起こす

「ん～……一体何の騒ぎだ……」

「そ、それがですね！」

事情を話し
ガバッと起きてリビングに向かって行く千冬さんについていく

「やぁちーｔｙ、痛い痛い！」

挨拶もろくにアイアンクローをおみまいする

「私はほどほどにしろと言ったぞ」

「痛いよちーちゃん！それにレイちゃんが正式に助手になってくれたなら渡そうと思ってたよ～」

ぱっと手を離す千冬さん

「イタタ、もう……初めての助手かもしれないんだから少しくらい大目に見てくれてもいいじゃないか」

「お前の少しは当てにならん……それで、どうするんだ零時」

「もちろんお願いします」

即答で返事を返す

「うんうん、じゃあこれあげる、レイちゃんが本当に変わりたいと思うなら使うといいよ。こっちの青の方は君のＰＣの中身にあったゲームを参考にしてるから特に説明はいらないね、こっちの紫の方は……まぁレイちゃんが私に約束したことを守れていたらきっとこの子が教えてくれるよ」

そう言って

青と紫のリストバンドを渡される

「あぁ後名前は決めてないからレイちゃんが決めてね、じゃあ束さんは忙しいからこれで行くね」

「えっ？！助手の事ってどうなってるんですか？」

「私は今からでもそうしたいんだけど…」

そこで束さんが千冬さんを見る

「もうＩＳ学園行は決まっている。それに高校は通っておけ」

「だって……でもＩＳで通話できるしどこに居てもレイちゃんは私の助手だよ」

にっこりと笑う束さん

やばい、かわいい

「じゃ、ばいば～い」

いろいろ話したかったが行ってしまった…ＩＳの事もっと聞きたかったのに

「束に惚れたか？」

突然聞いてくる千冬さん

「違いますね。憧れ……ですかね」

「そうか……そのＩＳだが今は使うなだが身に着けてもいろ。そして隠してもおけ」

「無茶なこと言いますね？！」

◇

バン！

突然耳に入ってきた音により
イスに座ったまま飛び上がってしまった
「驚かせた事には謝罪いたします」
ペコリと頭を下げているセシリア・オルコットが目に入る
妙なところで律儀だな
「ですが！先ほど…いえ、今朝から声をかけているのに無視するのはどうなのでしょうか！！」
そうだ…俺は現実逃避していたんだ
「すまない、現実逃避していて気付かなかった」
こっちが悪いのだから俺も頭を下げて謝る
「しかしだオルコット……君がもし逆の立場ったらこの状況でいつも通りに過ごせるか？」
何を言ってるんだこいつ？みたいな顔された
「考えてみろ……ＩＳは男しか使えない…そしてオルコットは女で唯一ＩＳを動かせた……そしていつの間にか始まる男に囲まれた状態でいきなり始まる生活……どうだ？これだけでも現実逃避したくならないか？」
目を閉じて考えていたセシリア・オルコットが目を開ける
「そうですね……まだ慣れていないうちはつらいかもしれません」

こりゃ全然わかってないな

「まぁいい、とりあえず君をわざと無視していたわけじゃないんだ。ところで今何時間目だ？」

「これから４時間目が始まるところですが……授業中も現実逃避していらっしゃたのですか？」

ちょっと驚き――みたいな感じでいわれる

「まぁな。それに俺は１年の授業は去年やったしな、ＩＳに関してはそこそこ…というか結構できる自信はあるから最初のは聞いてなくても大丈夫なんだよ」

キーンコーンカーンコーン

「また聞けずに終わってしまいましたわ！」

「これ終わったら次は飯なんだろ？その時でも話してやるさ」

「絶対ですわよ！」

そういって席に戻って行った

「随分仲がいいみたいだな零時」

隣の席から拗ねた感じで言ってくる一夏

「これから３年もあるのに敵を作るよりはましだろう。それにあい

つ悪い奴ってわけじゃなさそうだしな」

「ん～……まぁそうかもしれないけど…」

そこで先生が入ってきて授業が始まった

09（前書き）

お久しぶりです

ではどうぞ

09

「お昼ご飯は鯖味噌定食です」

「鯖味噌定食って言ったら　はい、あ～ん　だよねレイちゃん」

「つかなんでお前いるんだよ悠」

「レイちゃんの居るとこに私はいる！」

「って言いながらもなんだかんだでＩＳ学園に入学したよな」

「うっ……それは……でもレイちゃんがＩＳ学園に来てくれたから結果オーライだよ！」

「まぁこれたのは束さんのおかげだけどな」

「レイちゃんを誘惑する女は私が許さない！」

「はいはい、現在進行形でだが一番俺を誘惑してんのは悠だかんな！？早く膝の上からどけい！俺の理性が決壊しそうだ！」

膝に乗っていた悠を隣のイスにどかす

「えぇ～、もう…ちょっとおさわりするくらいいいのに……」

「ダメダメ、お前どうせここが女の子だらけでちょっと焦ってるだろ？」

「うん……だってレイちゃんって小さい子とか年下系が好きだから…」

「いや最近は千冬さんとか束さんみてたら年上もくるなと思ったぞ」

「千冬姉は渡さないぞ！っていうか零時……そろそろ紹介してくれよ」

今まで空気となっていた一夏がシスコン能力で会話に参戦してきた

ちなみに食堂に来たときは4人で来ていた

俺、一夏、篠ノ之さん、オルコットで来ていたのだが食堂の入り口で悠に会いそのまま合流したのだった

「おぉすまん

こいつは俺の幼馴染で――――」

そこからは5人で改めての自己紹介

簡単にすればこんな感じで

篠ノ之との場合

「やっぱり篠ノ之は束さんの妹なのか？」

「そう…です…でもあの人と私は関係ない…です」

声はさほど大きくはないがどこか寂しいような悲しいような声で言う

「無理に敬語使わんでいいよ、一夏と同じように喋ってくれて良いから
そうか…まぁ優秀な人が近くにいるとそんな態度になるよな
俺も悠たちが優秀でよく比べられたことあったよ
よろしくな篠ノ之」

そういって手を差し伸べる

「あぁよろしく頼む、それと私のことは箒で構わない」

箒も手を差し伸べて握手をする

オルコットとの場合

「あんな決闘宣言しといて挨拶ってなんか変だな
それに俺と一夏あんなにバカにされてたし」

「あれは少し血が頭に上っていたせいで…いえなんでもありませんわ」

「そうだな今冷静になってちょっとは言い過ぎたと思ってくれればいいさ
じゃないと一夏とオルコット嬢の試合が盛り上がらないからな」

「あら？あなたも私と試合をするのですよ、それとも逃げるつもりなのですか？」

挑戦的な顔で言ってくるオルコット

「そんなまさか、このＩＳを使いこなすために踏み台にしてやるつもりだ
オルコット嬢こそ逃げるなよ？」
そういって手を差し伸べる
「私は逃げも隠れもしませんわ
それと私のことはセシリアで構いませんわ」
手を握り握手をする
「結果がどうあれ仲良くしてくれると助かる」
「あなたとはそれでもいいのですが……」
一夏のことをちらっと見て目があったのかプイッとさせるセシリア
「まぁよろしく頼む」
俺はその反応に苦笑いしかできなかった
一夏との場合
「とばしでよくね？」
「だな」

09（後書き）

セシリアの”私は”わたくしはで読んでもらうと助かります

10

見つけた！悠！あなたどこに行ってたのよ」

自己紹介も終わったころに悠の名前を呼ぶ上級生

リボンの色からして2年生が俺たちが集まっているテーブルのところにやってきた

「たーちゃんだぁ」

名前読んでいたからそうだとは思っていたが悠の友人のようだ

「あら？男の子が2人も…噂の男の子ね……悠が好きな方はどちらかな？」

なかなか……いやかなり美人だなおい！

「レイちゃん？」

目がこわいよ悠さん！

その笑顔は微笑みなんだよね？！そうなんだよね？！

「ヒッ！おおおおお怒んなよ！つか心を読むな！」

「読んでないもん！読まなくったって顔がデレデレだからわかるもん！」

そんな顔した覚えはないのだが

そう思い顔を触ってみると頬が上がっているのがわかる

「にやけてるな……すまん」

「何に謝ってるかわからないけど、わかればよろしい」

そんなやり取りを見て悠の友人がクスクスと笑っている

「話に聞いていた通り仲がいいね

じゃあ君が安部零時君かな？

わたしは生徒会長の　更識　楯無　悠とはクラスメイトでルームメイトでもあるの」

「そうか…いつも悠が世話になっているな、これからも悠と仲良くしてやってくれ」

「もちろん言われなくたってそうするわ

なんせ生徒会長の私を唯一まともに相手できる相手なのだからこちらからお願いしたいぐらいよ」

生徒会長の相手ってそんなに大変なのか？

「うんうん！そうだよ～、なんせＩＳ学園の生徒会長は”生徒会長、即ち全ての生徒の長たる存在は最強であれ”って言葉があるぐらいなんだから」

さすがは相沢は家系……最強が相手でもやっていけんのかよ

少しうらやましいなその才能……俺も少しは何かいいところがあればいいんだがな…

「レイちゃん……」

「っと…今のは忘れろ……それにお前たちが優秀なのは俺もうれしいんだから気にするな
嫉妬はするがな」

精一杯の笑顔でそう答えると

「うん！」

――――――――ドキッ！

正直今の笑顔は反則だ…笑顔なんて何回も見てきたがこの1年会っていなかったせいかものすごくこの笑顔にくらっときた

この笑顔ならずっと見ていたいぐらいだ…むしろオレだけの――――

「あの…えっと…レイちゃん…恥ずかしいな…」

「……当分覗くのは禁止だ」

「うん…そうする…私が持たなそう…」

俺が考えたことにこんなにも反応するのは…まぁ今でなくていいかきっと黒いウサギが来たときにでも話すことにしよう

「っと、もうそろそろ授業よ悠
挨拶はまた今度ゆっくりね
行くわよ悠、あなたしか私の相手ができないのだからしっかりして頂戴」

「うん、じゃあまた放課後にねみんな」

「また会いましょうね零時君と一夏君」

手を振ってそのまま食堂から去っていく悠と更識

「あぁ～なんかすまんなうるさくて、食事中だったし俺と悠がうるさかったおかげでみんなあんまり喋れなかったし、歳が違うからって遠慮しないでくれよな、じゃなきゃ俺3年間やってげそうにないし」

「俺は家で一緒に暮らしたから遠慮なんてしてないぞ、むしろ兄貴ができたみたいで嬉しいし
いやでも面白い人だな悠さんって、巧の妹なんだっけ？」

一夏の家で俺たちは遊びまくったせいかみんな下の名前で呼び合うほどに仲になっていた

ちなみに一夏の親友の五反田　弾とも友達になり同じく名前で呼び合うほどに仲良くなった
ただ俺だけはなぜか「零兄（れいにい）」って呼ばれている

「そうだな、あの2人は双子の兄妹だな」

「確か幼馴染でもあるんだっけ？」

「そうだな、いつ初めて会ったのか忘れるくらい前にあったな
今は黒髪だが実はあの2人初めて会ったときは銀髪だったんだぜ」

3人のの驚く顔をちょうど見たとき

キーンコーンカーンコーン

「おっと、悠達が授業に向かった時点で俺たちも戻ればよかったな俺たちも戻ろう」

11

放課後

「悪いな一夏付き合わせて」

今教室にいるのは俺と一夏だけ
まぁ廊下には俺らを見ようときた人がいるのだが…え？人数？聞かないでくれ

「気にすんなよ、それにすぐに話が終わるなら一緒に帰れるだろ？」

俺たちはまだ寮ではなく家から通学
実家もそんなに離れているわけではないしせっかくの男２人だし一緒に帰ろうということだろう

「ＩＳのことも零時に教えてもらっただけあって授業もしんどくないしよかったぜ」

「ＩＳは復習がてら俺が教えてやるからいいとして、ＩＳのこと以外は自分で何とかしろよな」

「マジかよ」

そんな雑談をしながら放課後に来るといってまだ来ていない悠のことを待っていると

「よかった、２人ともまだ残ってくれてたんですね」

教室に残っている2人とは俺たちのこと
そして俺たちのことを呼んだのは

「あれ？山田先生？どうしたんですか？」

「やまだまや、逆から読んでもやまだまや先生ではないですか」

と俺が冗談かましてると

バァン！

「馬鹿者、目上の者には敬意を払え」

出席簿アタックをしてきたのはもちろん千冬さんこと千冬先生

「ちょっとしたコミュニケーションなのに…」ボソ

バァン！

「何かいったか？」

「いえなにも
それで何の用事で俺たちに？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そういって山田先生が２つのカギと部屋番号が書かれた紙を寄越す

「１０２６室ですか、でも寮使えるなんて聞いてないような」

「自分たちの状況を考えてみろ一夏、また千冬さんに助けてもらいたいのかお前は」

難しい顔をしながら考えてから

「そうか…男でＩＳ動かせるんだもんな
でも荷物とか何にもないような…」

「私が手配しておいた
着替えと携帯電話の充電器さえあれば問題ないだろう」

うわ、潤いのうの字もないぜ

「俺のはどうなったんですか？」

「お前のは相沢兄に頼んでおいた」

巧って千冬さんの召使いみたいだな……後でお礼言っておこう

「夕食は６時から７時です、大浴場がありますが織斑君と阿部君各部屋のシャワーを使ってもらいますね」

「えっ！！なんで大浴場使えないんですか！？」

「お前堂々と女子の裸みたいのか？」

ガラガラ

「あれ？山田先生と千冬先生もいる。あぁ寮のこと話してるんだね
ごめんねレイちゃん実は、お兄から連絡あってレイちゃんの荷物持
ってきたから校門まで取りに来てくれって言われて取りに行ってて
遅くなったの」

危なかった・・・・・きっとさっきの「えっ！！なんで大浴場使
えないんですか！？」の一夏の言葉に「そうだそうだ！なんでだ～」
みたいに答えてたら

バァン！

「ちょ！なんで俺だけ叩くんですか千冬先生！」

「お前はわざとやっているからだ、それと今の発言は相沢妹に伝え
ておく」

「許してください、ごめんなさい、もう2度と言いません」

土下座までして謝る俺

悲しいな俺

「もう聞いちゃったから意味はないけどね」

教室の扉の前で仁王立ちしている悠

「！？よ、よう悠、お、遅かったな」

「お兄から連絡あってレイちゃんの荷物持ってきたから校門まで取りに来てくれって言われて遅くなったの」

「そ、そうかありがとうな」

「それよりレイちゃん……レイちゃんは大浴場に入りたいのかな？それとも……女の子の裸がみたいのかな？」

ってきっとなっていたに違いない

「レイちゃん？私そこまでレイちゃんの行動を縛んないよ～どうしても見たいなら私ならいつでも見せてあげるよ」

体をクネクネさせながら言う

はたから見るとかなりの変人だな

話がいきなり変わっているせいか一夏と山田先生は頭にはてなマークを浮かべている

「山田君、会議の時間だ」

「もうそんな時間ですか？！先生たちはもう行きますね
ちゃんと寮に帰るんですよ、道草くっちゃだめですよ」

そういって千冬先生と山田先生は教室から去って行った

「道草もなにも校舎から５０ｍぐらいなのにどう道草くえばいいのやら」

苦笑いをしながらこちらに近づいてくる

「はいレイちゃん手だして」

そう言われて言われた通りに手を出すと
いきなり俺の前に黒いバックが現れる

「うを？！」

「それ荷物ね」

「な、なんだ今の？！俺の目がおかしくなったのか零時？！いきなり荷物が出てきたぞ？！」

「安心しろ一夏俺もだ」

慌ててるのが近くにいると冷静でいられるな

「ふふ、驚いた?私専用機持ちだから量子変換して拡張領域に入れておいたの」

１２（前書き）

話が進まない…

説明不足とか話飛んだりしててでも無理やりシャルとラウラが出るとこぐらいまでは少し早めにいこうかな・・・・・・

12

夜

１０２６室

「災難だったな一夏」

俺のベットは入って手前の方

そして奥にあるベットには灰になっている一夏がいる

「あがぁ～」

そしてこの灰になったのはお隣の１０２５室の住人にやられて帰ってきた

「災難っていうより自業自得じゃない？あとで箒ちゃんに謝っときなよ」

「まぁ引っ越しじゃないんだから隣に挨拶に行く必要もなかったし返事がなかったからって中に入った一夏も悪いな

そして悠よ……荷物の整理を手伝ってくれたのは嬉しいがいつまでここにいる気なんだ？」

荷物を取ってきてくれただけではなく整理まで手伝ってくれたのはうれしい

俺は家事全般は母さんと悠に頼ってばっかりだったから全然できないので助かるのだが・・・・・・お前は俺の母親か！？と言いたく

はなる

ちなみに巧からの秘蔵品は鞄を開けて真っ先に見つけられ一発処分であった

「レイちゃんって体小さい子の多いよね……ロリ？」と言われたが断じて違う

「てっきり専用機について聞きたいのかなって思ったからいたのに・・・・・・

とりあえず噂のことを聞いて今後どうするか聞いたら今日は帰るよ」

今日もってとこを強調して言わんでもいいっての

「噂？ってなんだ？」

「なんかイギリス代表候補生と決闘するらしいってホントなの？」

もう2年まで噂が……と言うか唯一２人の男のことなのだから当たり前と言えば当たり前なのか？

「まぁ事実だ、昼にいた金髪だ。それで今後のことってなんだ？」

「それ本気で言ってるの？

ほら！一夏も聞きなさい！」

まだだらり～んとしているがベットから起き上がる

「ＩＳの起動時間なんて２００時間越えしているであろう相手なんだよ？

よほど勝ちにこだわってないか油断してるかじゃないと絶対勝てない相手なんだよ？
それなのにレイちゃんと一夏は１０時間も起動してない素人もいいとこの人間、私ならそんな状態で私に挑んでくるならＩＳに乗りたくないくらい容赦なしで相手するね」

相手が悠じゃなくてよかったと心底思った

「でも対戦する前に努力してきたとわかるくらいのことをしてきたなら私なら相手に失礼の内容に本気で相手をするね」

さっきの容赦なしと本気がどう違うのかが理解できない

「前者は相手にするのさえめんどくさいから早く終わるように容赦なしで相手をする
後者は勝っても負けても相手と試合できたことを誇りにを持てるような試合をできるように本気を出すってこと」

「わかったような……まぁ話を続けてくれ」

「押し付けがましいけど2人には何もしないで試合をしてほしくないってこと…」

真剣だ顔で訴えてくる

「そんなの最初からそのつもりだ、なぁ一夏」

「おう、あんだけバカにされたんだ
負けてたまるかよ」

やる気満々の一夏

「と、いうことだ
それで相沢先輩……そんなことを言い出したんだ
何か提案があるんだろ？」

「やめてよ先輩だなんて
あるけど・・・とりあえず私に任せてくれる？」

「俺は構わない、一夏はどうする？」

「俺も構わないよ」

「じゃあ明日の放課後また教室で待っててよ」

12（後書き）

進まね～～～～wwww

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7745t/

ＩＳ-アベレージ　オア　ハーフ-

2011年10月13日10時15分発行